

世界の食糧生産を担う獣医師の国際学会 「第26回世界牛病学会」の概要

中尾敏彦[†]（日本産業動物獣医学会会長・世界牛病学会理事）



第26回世界牛病学会が11月14日から18日までの5日間南米のチリの首都サンチアゴで開催された。筆者は理事としてこの学会に参加する機会に恵まれたので、その概要を報告する。

世界牛病学会は、世界獣医学会傘下の国際学会の中でも最も有力な学会の1つであり、2年に1回開催されている。前回2008年の学会（ハンガリーのブダペスト）は2,500名、そして、その前の2006年の学会（フランスのニース）は4,000名の参加者を得て、盛大に開催され、牛の獣医学と獣医療の全ての分野を網羅する本格的な国際学会としての地位を不動にしている。本学会の特徴は、第一線の研究者に加えて、牛の臨床獣医師の参加が多いことであり、そのため、英語だけでなく、フランス語、ドイツ語、スペイン語を学会の公用語としている。

今回の学会は、開催国のチリが地理的に遠いことと、経済不況の影響を受けている国が多いことなどから、参加者は1,600人と、例年にくらべ、やや少なかった。国別にみると、参加者数が多かったのは、地元のチリの252人、お隣のブラジルの239名、続いて、イタリアの85名、アルゼンチンの78名、ドイツの74名などであった。日本からは、同伴者を含めて、30数名が参加した。

学会は、5会場で、臨床栄養、乳房炎、乳質、免疫とワクチン、代謝病、アニマルウェルフェア、ウイルス性感染症、細菌性感染症、蹄病、子牛、ハードヘルス、画像診断、予防獣医学プログラム、寄生虫病、繁殖管理と繁殖障害、内科と外科、毒性学、牛の臨床教育、繁殖とバイオテクノロジーなどのセッションが同時進行で行われ、合計で、32の基調講演、44の招待講演、160の一般講演と1,067のポスター発表が行われた。また、この他に、7つのワークショップと9つのシンポジウムがあり、さらに、メインスポンサーの製薬会社主催の3つのサテライトシンポジウムも行われた。

日本からは、5題の口頭発表と13題のポスター発表があった。5題の口頭発表のセッション、発表者名（敬称

略）と所属は次のとおりである。乳質セッション：永幡（酪農大）、蹄病セッション：柄（鳥取大）、繁殖セッション：片桐（酪農大）、Gautam（酪農大）、中尾（元山口大）。13題のポスター発表は、代謝病セッション：大谷（日甜）、乳房炎セッション：渡辺（動衛研）、細菌性感染症セッション：加藤（山形NOSAI）、ウイルス性感染症セッション：田島（北大）、免疫とワクチンセッション：岡田（京都微研）、子牛セッション：安藤（酪農大）、疫学調査セッション：畠間（動衛研）、繁殖障害セッション：大澤（岩手大）、中尾（元山口大）、繁殖とバイオテクノロジーセッション：阿倍（熊本県酪）、画像診断セッション：柄（鳥取大）、寄生虫病セッション：一条（根室地区 NOSAI）、内科と外科セッション：伊藤（新得畜試）であった。

学会の3日目に理事会、そして4日目には各国代表者と理事による合同委員会が開催された。理事会での主な報告および協議決定事項は次のとおりであった。

(1) 学会公用語の同時通訳会場数についての取り決め

発表はすべて英語とし、ドイツ語、スペイン語、フランス語への同時通訳会場を原則として4つ使用する。ただし、同じ言語圏からの参加者が200名以下の場合、その言語への同時通訳会場は3つとする。同様に、100名以下の場合には2会場、50名以下の場合には1会場とする。

公用語以外の言語への同時通訳の採用については、開催国の実行委員会の判断にゆだねる。

(2) 学会のニューズレター（オンライン）の発行

年3回発行。各国の関連情報も定期的に掲載する。

(3) 新規加盟国

中国、インド、エジプト各国牛病学会の加盟が承認された。

(4) 今後の世界牛病学会開催計画

第27回 リスボン、ポルトガル 2012年6月3日～8日

第28回 ケアンズ、オーストラリア

2014年7月27日～8月1日

(5) 第29回牛病学会（2016年）開催国決定のスケジュール

[†] 連絡責任者：中尾敏彦

〒069-0853 江別市大麻高町25-12 ☎011-386-3952 E-mail: rakunonakao@kyp.biglobe.ne.jp

立候補受け付け締め切り：

2012年4月1日 学会事務局（ブダペスト）
開催国の決定：

2012年6月 リスボンでの牛病学会理事会

今回の学会にも、世界中から多くの牛の臨床獣医師や研究者が参加し、新しい知識や技術に関する情報提供と情報交換が行われるとともに、参加者どうしの国境を越えた交流が活発に行われた。特に目立ったのは、若い獣医師の参加が多かったことと、南米、特にブラジルから参加した若い獣医師たちの熱意と勢いであった。あるブラジルの女性獣医師（大学院生）は、「ブラジルは今後世界の食糧生産基地としての大きな可能性を秘めている。私たちがこれからしっかり勉強して仕事に励み、ブ

ラジルの酪農を世界一にするつもりだ。」と熱っぽく語ってくれた。このように、若い世代が食糧生産を担う獣医師としての誇りと自信をもって、獣医療に励んでいる姿が印象的であった。

日本からも、比較的若手の獣医師が多数参加し、積極的に発表も行った。我が国の産業動物獣医療関係者も、このような学会の場で、どんどん情報発信して、国際的な連携の中で世界の獣医療の進歩に貢献するという姿勢が今後ますます求められてくるであろう。

2年後のリスボンでの第27回世界牛病学会も、ポルトガル牛病学会の手で、着々と準備が進められており、一段と盛大な学会になることが予想される。地球の食糧生産を担う獣医師としての使命感と誇りを世界中の仲間とともに共有できる絶好の機会になるものと確信する。